

## 第2章

### オーラルヒストリー・グループの活動報告

平田 光司 総研大薬山高等研究センター 教授

#### 1. オーラルヒストリーの目標と範囲

大学共同利用機関が集まっている総研大では、関連分野のさまざまな史料を集積し、歴史的な観点から大学共同利用機関の評価に役立て、科学史のための基礎資料（アーカイブズ）として研究者に公開すべく研究プロジェクトを推進しています。

主要な記録媒体は紙の資料ですが、それだけでは把握しがたい資こともたくさんあります。特に、公式記録だけでは表面的な把握になってしまいがちです。たとえば、実現しなかったプロジェクトの歴史や失敗の記録などは、ほとんど公式記録として残りません。そういうものも含めて、映像、インタビューなどを通じ、当時の社会的条件、環境、関わった人物などの記録や資料も収集していく必要があります。そういう意味では、これらもアーカイブズの対象となります。

このような観点からプロジェクトを進めていく中で、大きな役割を果たすのがオーラルヒストリーの手法ですが、大別すると次の3つの柱にまとめることができます。

1. 大学共同利用機関の設立に関わった方に、文献資料からは分からない状況について語ってもらうこと。特に、高エネルギー物理学研究所のように古い組織については、創設に関わった方も高齢化されています

ので、早急に実施していかなければなりません。

2. 現在の研究活動についても、多様な側面と切り口から多くの関係者のインタビューを行い、記録として残すこと。この分野については、高名な研究者だけではなく、その下で働いている助手などへのインタビューもしていきたいと思っています。また、1つの機関だけではなく、すべての機関に共通する横断的なテーマを設けて、たとえば女性研究者、データベース、教育機能、安全センターなどについて聞き出していくことも考えています。現在は、女性研究者について一部実施しています。
3. 巨大プロジェクトについて、研究者だけではなく、技術職員、事務職員、秘書、学生（当時）、外国の共同研究者、共同利用の研究者、地域住民、企業の研究者・技術者、建設関係者、などに広くインタビューすることが必要であり、また、意味が多いと考えています。これは私が代表者である科研費プロジェクト「オーラルヒストリーによる巨大科学の現代史資料システムの構築と共有化」（2006年度から）を中心に進める予定ですが、当然、「共同利用機関の歴史」とも重なるものです。

いずれにしても、オーラルヒストリーによって、さまざまな分野の人たちの生きた声を収録することは文化的にもきわめて価値があるはずですので、単なる文献資料の穴埋めという位置づけを超えて、十分活用していきたいと思っています。

では、オーラルヒストリーとは何かということですが、ただインタビューすればいいというものではありません。

オーラルヒストリーを用いる分野としては、人類学、社会学、歴史学などがあり、それぞれに考え方は違うと思いますが、われわれのプロジェクトを進めていく上では、あまり1つの分野に偏ることなく、社会にとって共通の学問的資産となりえる質の記録を残していかなければならないと考えています。その意味では、われわれももっとよく深く考え研鑽を深め

ていかなければなりません。

同時に、オーラルヒストリーに際して慎重に留意しなければならないのは、語り手の権利を尊重することです。たとえば語り手の語る内容が真実かどうかの検証ももちろん大事ですが、語り手がどう語ったかを記録するところにオーラルヒストリーの意義があると思います。

## 2. 2006 年度の活動

2006 年度は次の活動を行いました。

### 1. Women in Science : S.Traweek et. al.

多様な世代の女性研究者のインタビューを実施しました。3月現在、映像処理中です。また、女性科学者が研究を続けていく上での問題などについての研究会も開催しました。このテーマは今後も継続する予定です。

### 2. 共同利用機関の成立に関わるオーラルヒストリー

核融合研(NIFS)ではすでに実施されており、出版物も出されています。総研大葉山キャンパスでも、シャロン・トラウィーク(S. Traweek)さんの指導をおおぎながら、グループを形成することに注力しました。この分野においては、中井先生、木村先生、戸塚先生など諸先生方にもご協力をいただいています。

### 3. 巨大科学のオーラルヒストリー

私が代表の科研費「巨大科学のオーラルヒストリー」をベースに、巨大科学の活きた姿を学術的、経済的、社会的観点からとらえていこうとしています。たとえば、高エネルギー研のさまざまなプロジェクトを映像記録として残しています。また、ネバダの核実験に関わるオーラルヒストリーなどの研究をしている M. Palevsky 氏を招き、方法論などについて学習しています。その際、オーラルヒストリーの実習として、公開で小沼先生へのインタビューも実施しました。

#### 4. 倫理関係の書式の整備・検討

オーラルヒストリーを実践するにあたっての倫理関係の書式の整備も行いましたが、まだ足りない点もあり、今後の検討が必要です。

#### 5. 「外部委託」制度

オーラルヒストリーには緊急性もあるので、研究グループ外の方にもオーラルヒストリーインタビューを行ってもらい、謝金を支払えるシステムを確立しました。今年度はまだ実施できませんでしたが、今後は学生のアルバイトにもなるので、この制度を活用していきたいと思います。問題はインタビュアーで、一定程度の品質が求められますから、基礎知識の獲得、研修への参加などの条件が必要となります。また、同意書についても、誰と誰の間の同意書などかといった問題も発生してきます。私が考えているのは、①聞き手と語り手の間の同意書、②聞き手とヘッドクォーター(総研大)との間の同意書の2種類です。

### 3. アーカイブズ室の必要性

アーカイブズ化に際しては、きちんとしたシステムや組織が必要になります。そこで紹介しておきたいのが、物性研の教訓です。物性研は歴史研究に熱心な方がボランティア的に資料を集めていたようですが、この活はが物性研の仕事として確立していなかったためか、都内から柏に移転する際に廃止され、収集された資料の中には捨てられたりしたものもありました。

アーカイブズは単なる研究プロジェクトを超えた存在であるべきで、組織的にきちんとした体制で長期的に責任をもって収集保存し、公開する責任があります。それが、アーカイブズとしての社会的責任にほかなりません。そしてそのためには、大学、研究機関などの組織に、アーカイブズ室のような組織が位置づけられている必要があります。少なくとも資料が散逸しないように、担当責任者が決まっていることは最低限必要です。そうでなければ、アーカイブズの長期的展望はもちにくいでしょう。

そういう意味では、高エネルギー研、核融合研、分子研などは組織がきちんと整備されたので、大変望ましいことだと思います。私は最近、セルンのアーカイブズ室を視察してきました。アーキビストは1人ですが、しっかりしたアーカイブズ委員会が整備され、どういう資料を収集するかの基準もしっかりしているため、円滑にアーカイブズ活動が行われていました。ただし大変残念なことに、つい最近、アーカイブズ委員会はなくなったそうです。その大きな理由は、セルン自体の財政危機の影響だと思えます。

いずれにしても、何をアーカイブズするか、また、廃棄するかを決める組織が中心にあることが不可欠で、総研大としてもそういう組織を構築していく必要があります。

#### 4. 来年度の活動予定

最後に、2007年度の活動予定についてふれておきます。基本的には、今年度の事業を継続しつつ、新しい展開もしていく予定です。具体的には、科学映像の記録は継続しますが、同時に広報や教育への活用の可能性も検討していきます。

また、共同利用機関の創設にかかわるオーラルヒストリーについても、しだいに体制が整ってきたので、きちんと組織的に始めていきます。巨大科学については、当初は、つくばプロジェクト(高エネルギー物理学)を予定していましたが、関係者が多数にのぼるので、まずずばる望遠鏡をテーマに、ハワイの現地の人々との付き合い方、社会の変化などを調べていきたいと思えます。天文学は一般の人にも興味をもたれやすいので、パイロット・プロジェクトとして展開していく予定です。その過程で、オーラルヒストリアンが育ってくれば、つくばプロジェクトにもとりかかれると思えます。

さらに絶対に着手しなければならないのが、オーラルヒストリアンの養成です。外部委託するにしても研修が必要なので、そのリーダー養成のための研修を9月ごろ開催の予定です。また、映像についての知識とスキル

をもった人材を養成していかなければなりません。学生は映像に興味をもっていますので、総研大レクチャーなどを通じて実践していきたいと考えています。その他、外部委託システムを開始するにあたっては講習会を開催していきます。

同時に、社会学、人類学、歴史学などをふまえ、オーラルヒストリーのための理論構築を行っていくこともきわめて重要です。そして、アーカイブズ室のような制度・組織の創設も課題です。共同利用機関以外の機関でも同様の事情なので、ぜひ協働して進めていきたいと願っています。

### 〈質疑応答〉

—— 外注の場合、個人、会社、いずれも権利関係が重要になりますが、  
平田 契約書のひな型を用意するなど、権利関係はきちんとする必要がありますと思います。

—— 物性研の教訓の話がありましたが、アーカイブズの重要性を認識してもらうためには、精神論だけでは限界があります。具体的な方策と多面的な働きかけが必要だと思います。たとえば、総研大のような中心的な基盤機関でそういう認識を浸透させることも必要でしょうし、物性研の場合なら、物理学会でこのテーマの重要性について議論してもらうなど、多面的なアプローチが大事です。そうしないと、財政的事情でプロジェクトが中止になったり縮小されたりなど、状況によって変化してしまいます。

平田 そうですね。人とお金が必要なので、社会的責任論だけでは説得力がないんですね。アーカイブズを整備していないと研究所として“カッコわるい”という風潮になればいいのですが……。ただ、すでに高エネルギー研、核融合研などの研究所ではアーカイブズ整備を始めていますので、他の研究所でも始めていただいて、横の連携で仲間を増やしていくことがきっかけとして重要でしょう。

—— やはり、お金の問題は大きいですね。実際の作業では標準化もかな

り進んでいるので、その部分については総研大が負担するとか、いろいろな方法がありそうですね。

平田 総研大の基盤機関では、立ち上げのために、一時的にはそうした費用の使い方はありえるでしょう。すでに標準化の準備はかなりできてきており、これからの作業は楽になると思いますので、これから始めようとするところなどは、すべてをゼロから始めるのに比べれば相当に楽なはずですので、積極的に声をかけていくつもりです。

—— たしかにアーカイブズは社会的責任ですが、そうまともに言われると、おしつけられた感じが否めません。それより——実際は同じことですが——アーカイブズはおもしろいということを先にアピールしたほうがいいと思います。科学も歴史も文化遺産ですから、まずおもしろさをアピールして、その次に、大事だという順番でない、社会的責任論だけでは、なかなか浸透しないのではないのでしょうか。

平田 そうだと思います。

—— そういう意味では、野辺山の電波望遠鏡のオーラルヒストリーが非常におもしろいですよ。

平田 大森先生が中心になって映像記録をとられています、学生がインタビューするなど、大変おもしろい試みでした。

—— 宇宙研も、オーラルヒストリーはどうかわかりませんが、いろいろアーカイブズに関わる活動を実施しています。

平田 アーカイブズは広報としても重要なので、その方向からのアプローチもあるでしょう。自らの歴史を知らないのに、有効な広報活動はできないですから。

—— 物性研創設のころは、所長をはじめ熱心な人たちがいて、予算もつき研究会なども開催していますが、代替わりして意識の薄い所長になったり、熱心な所員が次々に異動したりすると活動が長続きしません。所内を説得できる安定したプロジェクトでなければ続かないという教訓ですね。

平田 その通りです。組織的に規則の上からいくらしっかりしていても、

それを覆すことは常に可能ですから。現在のセルンもそういう状態ですね。

—— たしかにボランティアベースでは続かないという面はありますが、だからといって、すぐに組織を作ったり、国に頼ろうとしたりすることは注意したほうがいいと思います。そういう意味で、今の総研大の方法は大変いいと思いますが、若い人が興味をもつシステムを工夫することが大切ですね。なんでも金や組織に結びつける議論は危険です。両方大事で、バランスのとり方が重要です。

平田 たしかに両方大事ですね。

—— きっかけとしては、熱心なグループがボランティア的に着手しないと始まりません。それだけでは長期的に持続しないので、安定的に続ける方法、体制を考えていかなければならないでしょう。

平田 共同利用機関では、そのようなボトムアップの活動のある時期から組織的にもサポートする、ということが可能だと思います。当初は数人の熱心な方が検討していたことが、大きなプロジェクトに発展した例は多いのではないかと思います。たとえば KEKB プロジェクトなどはそのような経過をたどったと思います。各機関の中で、アーカイブズ活動の必要性和面白さを認識してもらうようにする努力が重要だと思います。